



『変化や有事に負けない人を育てよう』

新型コロナウイルス対策による自粛期間がようやく明けました。ご家庭の皆様におかれましては数々の御苦労があったことと思います。改めてご家庭の皆様、大変お疲れさまでした。

この自粛期間中、日々、不測の事態や変化が続き、大変ストレスを感じた方も多くいるのではないのでしょうか。これは無理からぬことです。

『脳』には「自己保存の法則」というものがあります。脳は自分を守るための機能を持っており、自分を変えようとする因子を警戒し、拒む傾向があります。人によって、その度合は異なりますが、変化に伴うストレスを感じるのはこのためです。特に今回は行動も制限された中で、次から次に変化が起き、そのストレスは尋常なものではなかったのではないかと推測されます。

さて、日々の変化に対してストレスがたまる中、時にはそれが行動や言動になって表れてしまいます。人間らしいといえれば聞こえは良いですが、それを次の世代にぶつけていいものでしょうか？もちろん答えは否です。

私たち大人は、次の世代に変化や有事に負けない姿勢、変化や有事に対するストレスに耐える姿勢を示すべきではないでしょうか。

私たちは常に『変化』『有事』と対峙してきました。近代史だけを振り返ってみても、明治維新、第二次世界大戦後、高度経済成長期、バブル後の失われた

10年、そして東日本大震災……その時々で先人たちが私たちが変化に負けないよう「知力」と「精神」を養い、幾多の変化を乗り越えてきました。その当時子どもだった世代は、当時の大人たちの変化に対する奮闘努力を見て育ち、次の変化へと備えていったことと思います。

自身の昔話で恐縮ですが、バブル後の不景気下、自身の両親が苦勞しながらも知恵を振り絞って生き抜いてきたことを今もはっきり覚えています。あの時、両親はストレスを表に出さず、常に明るく考えること、行動すること、前向きに生きることの大事さを、身をもって伝えてくれました。そのおかげか、自分自身はこの時期に取り乱すことなく、日々明るく過ごすことができています。当時の教えや精神は活きていると誇りをもっています。

変化の時代だからこそ、私たち大人は、変化や有事に負けない「知力」と「精神」をもって立ち向かう姿勢を次の世代に示していくことを改めて肝に銘じることが大事ではないでしょうか。そして次の世代の人たちが、変化や有事に負けない人になるよう育てていくことを今一度思い返すことが大事ではないでしょうか。



「変化に負けない『知力』は、あらゆる分野から学ぶことから生まれます。学んだことで培った知識や考え方から、正しい判断や冷静な対応ができるようになります。

「変化に負けない『精神』は、大人の前向きに明るく挑む姿勢、失敗を恐れず行動する姿勢を目の当たりにすることから生まれます。

◎次の世代にあらゆる分野の学問を積んでもらうために、可能な限り大人が機会を与え続けていくこと

◎私たち大人が今、何を考え、どうしようとするのかを知ってもらい、逆に次の世代にも意見や考えを聞き出しながら、情報を共有しながら前を見据えさせていくこと。

◎大人の日々の奮闘努力を見せること。

今後益々未知の変化や有事が現れることでしょう。

私たち大人はこれまで培ってきた『知力』と『精神』をもって乗り越えていきましょう。そして、変化や有事に負けない次の世代の人たちを育てていきましょう！
(青木)

作業から勉強へ

●自分としては勉強しているつもりなのだがなかなか成績の方は上がらないと悩んでいる塾生が少なからずいると思います。絶対的な勉強時間が不足している人は論外として、勉強時間の割には、成績の上からない人たちについて少し考察してみたいと思います。

●この手の生徒の共通点は、勉強に時間を費やしているのではなく、作業に時間を費やしてしまっているということです。例えば、いくらきれいにノートを作っても、その内容が頭に入っていないかなければ、それは単なる作業であり、勉強したことにはならないということです。したがって成績の向上もありません。それでは以下に具体例をいくつか挙げて説明してみよう。

●二十個の漢字を覚えるとき、ただその漢字を十回ずつ書いただけでは作業です。覚えようという意識が働くことが必要です。その意識をもってならば、読み方や意味もわからないままただ漢字を書くというような愚かな作業はしないはず。英単語を覚えるときも同様、発音もわからないままスペル

練習をしてもそれは一過性の作業に過ぎません。どちらの場合も覚えようという強い意志が働けば、覚えやすく忘れにくいようにと考えて練習するはず。こうなると初めて漢字練習やスペル練習も勉強となりうるのです。単なる作業を繰り返しても時間の無駄にしかなりません。

●英語で不定詞の単元を学習し、その問題練習をするとき、文の意味も考えず、ただ不定詞をあてはめていくのは、作業です。どうしてこうなるのかと考えながら問題練習をして初めて勉強です。実際の試験では不定詞があてはまるかどうかを判断しなければなりません。しかし、理解を伴わない作業ではこの肝心の判断力が全くつかないのです。したがって得点することはできません。

●問題演習のとき、ただ解いていくだけで答え合わせもしないのは作業。答え合わせをしたただ○×をつけるだけでは作業。勉強とは、間違えたりわからなかったりしたときに、立ち止まり納得するまで考えることです。言い換えれば頭を使っていない勉強は単なる作業に過ぎないということです。

●単なる作業の勉強から本当の意味での勉強への脱皮が学力向上には必要条件です。成績が伸びないで悩んでいる人たちは少しこのことを考えてみてください。

「集団知」

●「集団知」の続きである。この記事の特質上、政治的な偏りと思われることは書けないのであるが、取り上げる対象はどうしても多くの人が断片的に知っている世の中の事象になってしまうことは



(村上)

了解していただきたい。

●およそ能動的行動はほとんどが思いつきで始まる。勿論、その思い付きの根底には本能、気質、その環境の中で形成された習慣や価値観、様々な経験がある。習い事を始める、部活を選ぶ、志望校を決める、受験科目を決める、就職する業種を選ぶ……。服を買う、食事をする店を選ぶ、本を買う、映画を観る。実に多くの行動が思いつきでスタートする。これらは個人の行動に限定したものだ、それぞれが情報を集め、また他者の判断をもらったり、そうせざるを得ないような働きかけがあったりして、具体的行動へと移す。スポーツや習い事であれば、適性が十分にあり、情熱を傾けることができる、大きく花開くこともある。両者があるいは一方が欠けていて、望む成果が得られないこともあるし、途中でやめることもある。そして、結果は本人が受け止めるのが暗黙の約束である。

●実は集団としての選択も思いつきで始まる。著名な人、権力を持つ人などが思いつきで動き始め、分析計画を立て支持者を集め発言し、行動していく。集団といってもそれが企業とか地域の共同体であれば責任はそれにかかわる人々がとることになるし、失敗したらまた変更も容易である。しかしこれが他方で国民全体でのことになると、そうはいかない。ある政策が実施されたとき、変更は容易ではない。実施までに何年もかかるものもあるし、変更にも相当の時間がかかる。そして、「実施された」ということは異なる意見を持つ人がいたとしても集団としては受け入れ



たということの意味する。このことを忘れてはいけない。

●少し長くなるが具体例を考えよう。少子高齢化を国難とする声がある。しかし、少子化と高齢化は全く別の問題であり、一緒にまとめて考えるのは無理がある。高齢化は医学の進歩、社会福祉制度の進歩など、寿命が延びる要因はたくさんあってその結果である。少子化もしかし。一つは人々が日々の生活に昔以上にお金をかけるようになったこと。或る知人によると、彼の一家は東京で家族四人六畳一間の風呂なしアパートでの暮らしだったそうで、それは稀なケースではなかったとのこと。今は一人暮らしの大学生でも入居しないだろう。大学の授業も昔はもっと安かった。国公立なら月に三千元とか一万円。安アパートに住んで、バイトして何とかやっていける金額。今は何十倍にもなった。私立の学費ももっと安かった。昔の奨学金は無利子であった。大学を出た後教員になれば、返済を免除する制度もあった。今は、ほとんどが利子付きで、二百万とか三百万とかの借金を背負った状態で大学を出る。返済はなかなか大変である。非正規雇用が増え、生きるのが精一杯の低収入の人たちが増えている。子ども一人を公立で大学卒業まで一千万、私立なら二千万かかると言われる。こんな状態の中での子育て、人によつては結婚も大変である。政治家の『少子高齢化』に全力をあげます』の言葉で済むような話ではない。こうなることは何十年も前から分かっていたことで、

国民が集団として受け入れた結果である。
(小林)

前頭葉を耕す

●「居着き」

「居着き」という言葉を初めて目にしたのは、武道家の甲野喜紀さんと仏文学者の内田樹先生の対談

集の中だったかと思えます。稽古や試合で相手とじつと対峙しているとき、自分でも思うように動けなくなってしまう、まさに一瞬、出遅れてしまう、そんなよくない状態のことだそうす。

その「居着き」の状態を避けるため、実際に身体を動かしていなくても、頭の中ではもの凄く速い動き続け、精神の張りを保ち、いつでも動き出せる準備をしているのだそうす。

●「変速機」

確かに、完全な停止状態から動き出すときの方が、動き続けているときよりも、時間もエネルギーも多くなかかってしまい、やっかいです。

君たちも変速機の付いた自転車を連想すれば分かると思います。スピードが出ているときは重いギヤでも快適です。しかし、いったん止まってしまったあと、その重いギヤのままこぎ始めても、踏ん張っているわりにはなかなか進まない、そんな経験をしたことがあるでしょう。動き出す時にはギヤを軽くするのがコツです。

●「耕す」

医学博士である築山節先生の著書の中で「前頭葉を耕す」という表現に出会いました。

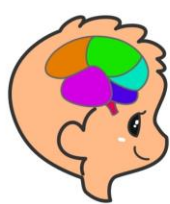
脳を「鍛える」書籍が氾濫する中で、「耕す」という表現が、私にはとても新鮮なものでした。

「鍛える」前の段階として、「耕す」段階があるのだという、半ば勝手な解釈とともに、実際の農耕にイメージを重ねることもできました。

冬の終わりに、表面が乾いて硬くなった土を掘り起こします(「耕す」は「田返す」からできた言葉だそうです)。ザクザク掘って、ふつくらやわらかくなった土には、チッ素もたつぷり入り、肥料も混じりやすくなり、ミミズも住みやすくなります。なにより作物がその根をしっかりと伸ばせることでしょ

う。このように「耕す」という表現には何か可能性を感じさせる響きがあります。

さて、我々の前頭葉を耕すには、日常の細かいことをきちんと行うことが有効だそうす。靴を手できちんと揃える、食事の後片付けをする、食器を元に戻す、脱いだ衣服をそのままにしない、等々きつとたくさんあることでしょう(教室のイスを戻してくれたり、消しカスをきちんと捨ててくれて、いつも



ありがとう!)。大きな改善の前に、小さく面倒なことでもきちんとしつかり達成し続けることで、脳の耐性が変わり始めるそうです。

●再開にあたり

ようやく世の中の様々な活動が(以前と全く同じとはいきませんが)正常時に戻り始めてきました。学校での授業や、創学舎の教室での対面授業が休みだった期間、皆さんはどのように過ごしていったか。

教室での授業を段階的に再開してから、「自ら学ぶ」その歩みを止めなかった人たちも大勢いることが分かり、実は感動しました。振り返ると、三月から春期講習のあの頃も、「教室の生徒のみんなの集中力や真剣さがいつもより上なのではないか?」と講師同士で話していました。

対照的に、つい日常のリズムを崩してしまった人、今「これではまずい!」と思いつき、現在格闘中の人は、「居着き」の状態から離れるために、ぜひ「前頭葉」を耕して、一日も早くハツラツとした自分、イキイキした自分を取り戻してください。

(五田市)